

舞台芸術スタッフ×障害者の可能性についての一考察

児玉孝文 宮崎大学産学・地域連携センター
山森達也 アーツカウンシルみやざき
愛甲美玖 特定非営利活動法人 MIYAZAKI
C-DANCE CENTER

研究の目的

「障害のある人が踊るワークショップ（以下、「WS」という。）は全国に多数あるが、舞台の裏方やサポートを担うWSは聞いたことがない。」振付家のこの一言から本実践研究はスタートした。実際のところ、障害者アートや、作品制作を行うことまでは認識されているが、文化芸術に関わることを仕事として捉えるのは、現在の障害者の就労の中では難しい。しかし、障害がある人に限らず、自分たちの興味関心、創意工夫が仕事につながっていく、その仕事に積極的に関わりたいと思えるものがあればあるほど、自己肯定感、自信を育てていくことになるのではないだろうか。

そこで、障害者とアーティストが協働して「ダンスステージをつくるWS」を実施し、障害のある人（特に、中・高校生）とその家族、特別支援学級・学校の先生、文化芸術の関係者等の、舞台の裏方やサポートを担う仕事に対する捉え方の変容を探った。

研究の方法

本実践研究を、アーツカウンシルみやざきが実施する「天鈿女命育成講座」（令和元年度文化庁委託事業「障害者による文化芸術活動推進事業」）のメニューとして実施した。

実施期間：2019年12月～2020年1月

実施内容：90分×5回

対象：特別支援学校・学級の児童生徒（若干名）

講師：んまつーポス（ダンス）

ゲスト講師：大園康司（照明）・大野源喜（音響）

参与観察：高橋るみ子（舞踊教育）・草野勝彦（特別支援教育）

結果及び考察

県内の特別支援学校・学級の協力の下、広く公募したが、参加者は県立の視覚支援学校と公立小学校の特別支援学級に通う小学生2名（過去にんまつーポスのWS受講者）であった。

<第1回 オリエンテーション> 劇場の裏側を見たり、機材の説明を受けたり、ケーブルを運んだりしているうちに2人とも楽しそうな表情に変わった。音は出るもの、照明はついているものと当たり前だと思っていたことがそうではないことに気づいたり、自分ができるとは思っていなか

ったこと（音を出す、照明をつける）ができたりした喜びが伝わってきた。

<第2回：ダンスの公演を観る> 前回のWSで、自分が見つけない照明がつかか、音がなるかどうかを確認し、照明・音響卓の一番近い席から、目を輝かせて公演（コンテンポラリーダンス）を鑑賞していた。公演後に照明と音響について質問するという宿題が出されていたので、自分ならどうするかという意識が生まれていたように見えた。

<第3回：プロの仕事を見る> ゲスト講師に教わりながら、スイッチを操作している時は少し緊張した表情を見せていたが、仕事（ステージで踊るんまつーポスの動きに合わせて光と音をつける）を終えて、達成感溢れる表情に変わった。照明と音響のどちらを担当したいか尋ねると、「私は、照明の方をやりたいです」「うーん。音の方がいいかな～」と役割が決まった。

<第4回：リハーサル> これまでは講師だったんまつーポスから、今日は、お互いに呼吸を合わせながら一緒に舞台をつくるパートナーになりますと知らされて、少しはしゃいでいたが、すぐに真剣な表情に変わって機材に向かっていった。また、舞台のサポートの一つに観客動員という仕事があること、芸術は相手がいてはじめて成り立つこと等を伝えられて戸惑う様子が見られた。

<第5回：本番> 自分たちが照明や音響をすることを、学校の友だちや先生にチラシを渡しながらか話して、この日のステージを一緒につくるお客さまを自分たちで集めてきた。満席（100人以上）の客席を見渡す様子には、遊びではなく仕事をしているという緊張感が伝わった。また、2人がどの作品の照明・音響を担当するかはアナウンスせずに、最後に観客に伝えた。自分の仕事と名前が紹介されて、観客の拍手に答えている表情から自信が感じられた。

<公演後のインタビュー>

○視覚支援学校長：私、照明をしますからと自信を持って言うので来てみましたが、その自信のほどが伝わってきました。

○来場者：うちの子も（障害の程度が）同じくらいなんですけど、今日来ていたらやってみたい！と思うだろうな、と思いました。

この「ダンスステージをつくるWS」の記録動画を見た大塚千枝氏（厚生労働省障害者芸術文化活動支援専門官）は、照明や音響のスタッフとして障害のある人達に関わってもらうことに新しい可能性を感じたと述べている。社会が、障害のある人の仕事として舞台の裏方やサポートを担う仕事を考える日はまだ先かもしれない。しかし、経験する機会には誰にも平等であるべきである。このことを確認できたことが本研究の成果である。